
マフィアのボスですが何か？

麗雪・L・レイユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフィアのボスですが何か？

【Nコード】

N7720X

【作者名】

麗雪・L・レイユ

【あらすじ】

平穏な中学校生活を送りはじめた土田鈴蘭こと蘭。

運動神経は悪いが、クラス一の秀才。

しかし、それは蘭の表の顔だった…。

裏の顔はマフィアのボスとして、平穏な生活を死守すること！？

蘭は始まったばかりのこの平穏な生活を送り続けることができるのか！？

幸福が訪れる／繊細

「蘭！いったよ！」

「ふえ？」

蘭の頭上に飛来するボール。
見上げる蘭。

ゴチーン――！

蘭の顔面に見事なまでに直撃した。

「あちゃ〜…」

「い、痛いよ…」

鼻の頭を両手で抑える蘭。

「ごめん…あんたが運動神経ないのをすっかり忘れてた」
笑い飛ばす少女。

蘭の様子からしても、よくあるようだった。

「紅^{へに}…わざと…」

横でつぶやく少女。

「やっぱり…私をからかって楽しんでいるんだね、紅は」
脱力する蘭。

（うん…諦めよう…）

今は四時限目の体育の授業。

競技はバレーボール。

（“運動神経がない”…か）

人知れず蘭はため息をついた。

キンコンカンコン

授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

「うつし、昼飯だ〜」

ものすごいスピードで教室にもどる紅。

「…撫子、ゆっくりもどろうか」

「うん、紅についていく必要ない…」
そういうと二人も教室へとむかった。

「いや、うまかった。わらわは満足じゃ」

ほっほっほ、と扇子を手に持ち扇ぎそうな雰囲気です。紅が言った。

「あんたは殿か何かか」

すかさずつつこむ蘭。

「うむ、殿じゃ」

「…紅に何を言っても無駄」

撫子がボソッとつぶやいた。

「撫子ヒドッ！」

そんなたわいもない話をしているときだった。

蘭は急に背後から声をかけられた。

「土田」

振り返ると一人の少年がいた。

「えっと…どちら様？」

「隣の一年二組の大木木蓮だ。おおきもくれん土田…こんなところで悪いんだが…」

（なんだろう…こんな教室の中で…）

中学となれば男女の会話は極端に減る。

その中で話があるというのだからきつと大切なことなんだろう、と蘭は思っていた。

「俺と付き合ってくれ！」

ぶほッ

隣でむせる紅。そんな紅の背中をさする撫子。

「えっと…ごめんなさい。まだそんなこと考えられなくて…」

迷わずにそう答える蘭。

「そうか…時間をとらせて悪かったな、じゃ」

大木はそういうと教室から出ていった。

「ひゅゝ、もてる女はツライねえ」

口笛が吹けないのか口で言う紅。

「蘭の気持ち、分かる。今はまだ考えられない」

「…うん。大木に悪いことしたかな…」

うつむき真剣に悔いる蘭。

「うつん、考えすぎ。今はそれでいいと思う」

微笑む撫子。

「ありがとう、撫子。ちょっと気が楽になったよ」

笑みを返す蘭。

「うわぁ…もてる女の悩みだ…」

なんとも言えない表情でそんな二人を見ていた紅であった。

幸福が訪れる／織細（後書き）

サブタイトルは、主人公蘭こと「鈴蘭」の花言葉です。

包容力／熱狂

「ウキッ、ウキキキッ」

紅の頭の上で一匹のサルが跳ねた。

「ルモもそう思っつてさ」

「ウキッ！」

なぜ中学校にサルがいるのか、そう思うのが普通だ。

それはこの世界がそういう世界だからである。

この世界にはたくさん性の質を持つ生き物がいる。

例えば、物を燃やす能力をもつ生き物や物を氷らせる能力をもつ生き物。

それぞれ同じ種類の生き物でもまったく違う能力をもっている生き物もいる。

そんな生き物たちのことをこの世界では、れいせい霊生と呼んでいる。

そんなこの世界では人間は、生まれてすぐに自分にあつた能力をもつた霊生と契約をする。

契約は、お互い（契約者と霊生）の同意により成り立つ。

だが、生まれたての赤子には言葉はおろか、文字も伝わらない。

そんな中でどうやって自分にあつた霊生と契約するのかというと、

本質的に相性のいい者たちが契約する。

本質とは、この世界の生き物（人間も含む）すべてが持っているもので、生まれたときに分かる。

そして、相性のよい生き物同士で契約を行う。

小学校では自分の契約した生き物（契霊）について学び、中学校では次の段階を学ぶ。

その次の段階とは、契霊の力を引き出す、ということだ。まあ、よ

うは実践である。

そういう理由により、各地域の中学校では契霊を学校につれてくるのは常識なのである。

「相変わらず似たような性格なのね、紅とルモは」
あきたように言う蘭。

「契霊は契約主に似ると小学校で習ったが…ここまでとは…」
真剣に考え込む撫子。

「はあ…うん…もういいよ」
疲れ果てた様子の紅は、机へと倒れこんだ。

昼休みもあとわずかとなった頃、三人組の少女たちが三人で談笑をしていた蘭に話しかけた。

「土田さん、ちょっといいかしら？」

いかにも“お嬢様”風の少女が気取った態度で蘭に話しかける。

「何の用かな？」

（嫌な予感がするなあ…嫌な予感しかしないなあ…）
内心ではそう思っていたが「無理です」とはさすがに言えなかった。

「よくも…よくも私の大木君を振ってくれたわね！」

「私の華樹君もよ！」

「この男たらしが！ちょっと頭がよくて、ちょっと可愛いからって調子に乗ってんじゃねえよ！バカ！ブスはブスらしく三木たちとずっつと遊んでいればいいのよ」

「なんなら、三人で同性愛でもしちゃえば？」

きやははっ、きやははははっ――

三人の下品な笑い声が教室に響く。

（何しに来てるんだろ…馬鹿らしいなあ…）
蘭は心の中で思ったが、もちろん声には出さなかった。

が、ほかの二人は違ったようだ。

「…そうだな、三人仲良くというのも悪くない」

「はは、いいねそれ。私もハミゴにならなくてすむし」
心の中で思ったことを口にする撫子たち。

（頭痛が…）

こめかみを押さえる蘭。

三人がそれぞれの反応で返した。

「き、貴様らあ！！」

一歩後ろにいる少女が怒鳴る。

「調子にのるなあ！！」

そういうと、お嬢様風の少女の肩に乗っている猫の毛の色が白からオレンジ色へと変わった。

包容力／熱狂（後書き）

今回のサブタイトルは、紅こと「紅花」の花言葉です。

思慕／貞節／才能

お嬢様風の少女の手には一丁の拳銃。

今現在の学校教育では、契霊の能力である霊式を使うには、
形である波、霊波を自分の波長とあわせ霊式を使用する、
霊合と
いうものを主に教えている。

だが、それは“主に”教えているのであって他の方法も、もちろん
教えている。

それは、物体を特定し、その物体に霊波を添えることで霊式を発動
する、
霊添という方法だ。

霊合の指導は基本的に、小学段階で終了になっている。

そして、中学段階では霊添を教えるのが基本となっている。

中一といえど、既に授業は始まっており、もちろん霊添の指導も始
まっている。

そして、ほとんどの生徒は武器（殺傷能力の高い物）に霊波を添え
る。

「身の程をわきまえなさい！私はあの土村家の娘よ！調子に乗らな
いで！！」

そういうと、銃口を蘭へと向け勢いよく引き金を引いた。

銃口からは銃弾の形をしたオレンジ色の炎が放たれた。

その炎は真っ直ぐ蘭をめがけて飛んでいく。

（まずい！このままだとあの霊式が蘭に当たる！！）

そう思うが早いか、撫子は蘭の前へと歩み出た。

「撫子——！？」

悲鳴交じりの蘭の声が教室内に響く。

撫子の足元にいる白い兎が蒼く光り始め次の瞬間には撫子の前に水の壁が完成していた。

「な、私の炎の弾丸を相殺するなんて…。その白兎…ラビットシリズか!？」

床にひざをつき、信じられないと呟く土村の娘。

霊生には、稀に強い霊波をもって生まれてくるものがいる。そのような霊生を一般に、れいしん霊真と呼ばれている。

そんな霊真には一般の霊生と識別するために、識別名称として各靈性ごとにシリーズ名がつけられている。

撫子の白兎は「兎」という霊生の分類の中の霊真。「兎」の霊真の識別名称はラビットシリーズと呼ばれるシリーズだ。

普通、霊真の力は強大すぎるため人間と契約できない。正確には、人間の方が霊真の霊波に耐え切れない。そんな理由から、基本的には研究対象ということで実験場送りになる。

が、稀に逆の場合もある。

霊生が人間の波長に勢い負けしてしまう場合だ。

この場合、その人間は「契霊なし」と言うわけにはいかない。

となると、「同じ強い霊波をもつ霊真との契約がいいのでは?」という結論に至り、撫子たちのような契約者たちが近年増えてきた。

「あなたは私を怒らせた…。私の大切な友達に攻撃をした…。学校の中では授業以外では使ってはいけない靈式を…武器を…一時の感情に任せて使った!」

撫子が怒りを爆発させた。

撫子のいうことに言い返す言葉がない土村の娘。

そこに一人の女教師が入ってきた。

「誰！さっきここで靈式を使ったのは！！」

半ば切れ気味の教師の姿にしぶしぶ手を挙げる撫子と土村の娘。

「あなたたちね…事情は指導室で聞きます。来なさい」

二人を連れて教室を出て行く教師。

その場にいた残りの関係者である蘭たちはただ連れて行かれる撫子と土村の娘を見送ることしかできなかった。

思慕／貞節／才能（後書き）

今回のサブタイトルは、「撫子」の花言葉です。

愛／温かい心

「帰ってこなかったね、撫子」
紅がおもむろに口を開いた。

あの後撫子は結局帰って来なかった。

二人で学校中の先生に尋ねてみたが、誰一人として答えてくれなかった。

撫子がどうなったか分からないまま最終下校時刻となり、二人は仕方なく学校の門をくぐった。

（私のせいだ…私があの時もつと早く動いていたら撫子は靈式を使わずに済んだ！それなのに…）

思わず下唇を噛締める蘭。
唇から血が滴る。^{したた}

「ウツキー！ウキキキキー！！」

紅の頭の上で飛び跳ねるルモ。

「ウツキー！」

必死に叫び訴えるルモ。

（ルモ…何言ってるか分かんないけど、励ましてくれてる…）
そう思うと少し気分が楽になった。

「蘭のせいじゃないよ」

不意に今まで隣で黙っていた紅が口を開いた。

蘭は自分より少し背の高い紅を見上げた。

「って、ルモは言ったんだよね」

「ウツキー」

仲良く、まるで言葉が通じてるかのように話す紅とルモ。

「あ、ほらルモはアタシの契霊だから。なんとなく分かるんだよね、何言いたいのか」

笑いながら言う紅。

（これだけ仲がいいもんね…当然、か）

蘭もそんな二人につられて口元がほころんだ。

「さて、アタシは家こつちだからここで。——蘭の家はそっちでしょ？」

「うん。——また明日」

そういうと、二人はそれぞれ帰路へとついた。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「ただいま」

蘭が家の扉を開くと、一組の男女が玄関にいた。

「おかえり、蘭。遅かったね？大丈夫だった？」

心配そうにたずねる男。

歳は１７ぐらいだろう。そばにしていると落ち着くような空気を持っている。

「うん、大丈夫。心配かけてごめん、すいにい睡兄」

「謝らせたくて睡蓮は言ったわけじゃないんだぜ？そんなに小さくなるなつて」

隣にいた女も言った。

ワイルドな笑みを浮かべる女。

睡蓮と面立ちが似ていることからおそらくは兄妹だろう。

「ところで薔薇姉…何企んでるの？」
ぎくっ——

「べ、別に」

目を逸らす薔薇。

「知ってる？薔薇姉。人はやましい事があると目を逸らすんだよ？」
今度は蘭の目をジッと見つめる薔薇。

（薔薇姉…見事にはまる…ちょっと楽しいかも）

「で、結局どうしたの？薔薇姉」

「別に〜」

意味深な笑みを浮かべ続ける薔薇。

「…仕事…あるの……？」

と蘭が言い切る前に薔薇が蘭に抱きついて（飛びついて）蘭の体を揺さぶった。

「そうだぜ！仕事だぜ！！早く行こうぜ」。蘭が帰ってくるの待ってたんだからさ」

なおも体を揺さぶられている蘭。

「ば、薔薇！蘭の目が回ってるよ！！」
手を止める薔薇。

ばつが悪そうに視線を泳がす姉を蘭はいつものこと、と割り切っていた。

「わ、わりい…今は制御されてるんだっただな…」

「…いいよ、気にしてないから」

苦笑交じりの言葉になったが蘭は心底楽しそうに言った。

「それより仕事でしょ？行く用意するからココで待ってて」

ああ、二人が頷くのを見て、蘭は自分の部屋へと入っていった。

愛／温かい心（後書き）

今回のサブタイトルは、薔薇姉こと「薔薇」の花言葉です。

やさしさ／甘美

「ま、待ってくれ！」

後ずさりする男。

「み、見逃してくれ——！」

男の正面にはフードを被った少女が一人いた。

その者の周りには、一匹の黒に青紫の蝶が飛んでいる。

「何でも言うことを聞く！絶対だ——！だから——！」

「一つ教えといてやる」

男の言葉を遮るように話淡々と始める少女。

「この世界に“絶対”はない。お前が見たのだとすれば、それはまやかしだ」

その場に崩れ落ちる男。

「お前に選択肢はない」

少女が、右手を前へとそつとのばすと男は一瞬で氷付けになっていった。

少女の手のひらから零れ落ちる白い花びらが、氷付けの男の足元に落ちる。

「よい夢を……」

立ち尽くす少女。

「終わったか？麗」

いつの間にか、背後に立つ女。

「ああ。——後を頼んでもいいか？」

「おう、任せとけ。——先に、睡と一緒に帰っとけ」
ワイルドな笑みを浮かべる女。

無言で頷く麗。

次の瞬間には、たくさんの黒に青紫の蝶と共に麗は消えていた…

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「おはよ、蘭」

蘭が教室に入るなり、窓際の席の紅が声をかけてきた。

（…ああ…今の名前は“蘭”…だっけ…？）

「…おはよ、紅」

自分の席で、机に倒れこむ蘭。

（…気分悪…吐きそう…。体の中をぐちゃぐちゃにされたみたいだ…）

「ちょ、蘭大丈夫！？顔色よくないよ？」

心配そうに駆け寄る紅。

（ああ…心配かけたらいけない…）

蘭は苦笑いを浮かべた。

「少ししんどいだけだから…大丈夫だよ？」

思わず疑問系になった言葉。

「心配だな」。蘭は変なところ無理するからな…」

苦笑いしながらぼやく紅。

キンコンカンコン

チャイムが鳴る。

自席に戻る生徒たち。

ガラガラッ

扉を開ける音と共に教室に担任の女教師が入ってきた。
そして、その後ろにつくように撫子が入ってきた。

「ちょ、撫子！…どうしたの、その包帯！…」

紅が思わず叫んだ。

撫子の体のいたるところに、不自然に巻かれたたくさんの包帯。駆け寄ってきた蘭と紅から目を逸らす撫子。

「…別に…こけただけ…」

（十中八九嘘だな…こけたにしては傷のある位置と数がおかしい）
心の中でつぶやく蘭。

「嘘」

すかさず口にする紅。

「幼稚園のときからアンタとずっと一緒にいるけど、アンタがそんなに派手にこけたとこアタシ見たことないもん」

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

「授業を始めるわよ。みんな、席につきなさい」

教師に言われ、渋々席につく三人。

「…放課後…言う…」

小さな声でつぶやいた撫子。

「ダメ」

「昼休み」

蘭と紅にそう言われた撫子は苦笑いを浮かべた。

やさしさ／甘美（後書き）

今回のサブタイトルは、睡兄こと「睡蓮」の花言葉です。
（今回の更新では、名前しか出てきていませんが…）

自然への愛／持続性

「さ、撫子。昼休みになったからもちろん昨日何があったか教えてくれるんだよね？」

紅が撫子に詰め寄る。

「……」

無言で顔を逸らし、目を合わせようとしない撫子。

「はあ……これ、本当は言いたくないけど……」

蘭がおもむろに口を開いた。

「そこが撫子の一番悪いところだよ」

さつ、と顔を上げ蘭を見る撫子。

そんな撫子を見ながら、蘭は言葉をさらに続ける。

「自分の中に閉じ込めて、勝手に自分だけで背負い込んで……私たちは、幼稚園からの友達でしょ？ 幼馴染でしょ？——親友でしょ？」

蘭の最後の一言が撫子の心を揺さぶった。

静かに頷く撫子。

「だったら、遠慮なんて要らないってのも分かるでしょ？」

諭すように言葉を紡ぐ蘭。

「そうだよ、撫子。アンタはもつと私たちを頼っていいんだよ。むしろ頼って。アタシも頼りたいから、いっぱい」

紅の言葉に微笑みながら頷く蘭。

「……私は……私は……頼ってもいいの……？」

恐る恐る口を開き、言葉を紡ぐ撫子。

「当たり前でしょ、親友なんだから。私たちは」

蘭が微笑んで言った。

撫子の瞳から一筋の涙が頬を伝った。

何も言わず、静かに涙を流す撫子。
隠さずに、ただ流れるがままに…。

（たくさん我慢してんだな…）

静かに泣く撫子を見て、蘭は心の中でそう思った。

「…ごめん…二人とも…」

頭を下げる撫子。

「いいよ、気にしてないから」

微笑みを返す蘭。

「まったく…まわりのことも次からは考えてよね！」

頬を膨らませそっぽを向き、怒っている風を装う紅。

その証拠に、紅の瞳にもうつすら涙が浮かんでいた。

「教えてくれる？昨日何があったのか」

蘭が優しく問いかける。

無言で、しかししっかりと頷く撫子。

キーンコンカーンコン

しかし、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「…」

無言になる三人。

「KYなチャイムめ…。いつかこの恨みを…」
ぼやく紅。

「放課後は？」

蘭の提案に頷く紅。

「でも学校で、という訳にはいかないだろうし…」

撫子の言葉に頷いてしまっ、蘭と紅。

「とりあえず、保留にしておこうか…」

蘭が切り出した。

「うん、そだね」

紅がそれに頷き、撫子も頷いて昼休みが終わった。

自然への愛／持続性（後書き）

今回のサブタイトルは、以前登場したキャラクター、大木木蓮の「木蓮」の花言葉です。

古風 / 風情 / 秘密

キンコンカーンコン――

最後の授業終了のチャイムがなる。

「さて…どうする？」

放課後になり皆が帰路につく中、三人はまだ教室にいた。

「…明日は土曜で学校休みだし…家に、泊ま^{うち}てく？」

蘭が沈黙を破り、そう言った。

「蘭の家にお泊り！？なにそれ！超楽しそう」

目を輝かせて叫ぶように言う紅。

いや、叫ぶ紅。

「蘭…家の人に確認しなくてもいいの？」

撫子がもつともなことを言う。

「うん、そうだね。一応確認してみるけど、たぶん大丈夫だよ？」

ちよつと待ってね、そういうと蘭はポケットからコンパクト型通信機、略してC F C Iを取り出し、家の

回線につないだ。

C F C Iは片手サイズのパソコンみたいなもので、これをもつてない人間は数少ない。

対面式通話を可能にする高画質カメラ搭載の優れものだ。

ブルルルル、ブルルルル――

呼び出し音が三回なった頃、回線がつながった。

『もつしもーし、土田ですが何か？』

間伸びした声で画面に映る一人の女。

『って、なんだ…蘭か。どうしたんだ、何かあったのか？』

真剣な顔つきに変わる女。

「うっん、違うの。今日家に私の友達を二人ほど泊まっても大丈夫かな？」

面食らったように黙る女。

「薔薇姉？聞いてた？」

『お、おう。聞いてたぜ、もちろん。———ちょ、ちょっと待ってる。親父とお袋に聞いてきてやるから』

「うん、お願い」

軽快な音楽が響く。

画面には綺麗な花畑の風景が映る。

「…今のは蘭のお姉さん？」

紅が蘭に問う。

「そ。カッコいいでしょ？」

蘭が自慢げに言う。

「いいね…上がいるっていうのは。私は一人だから…」
撫子がつぶやいた。

「そだね。上がいるっていうのはとても心強いね」

微笑む蘭。

と、ちょうどそこで軽快な音楽が止んだ。

『おーい、蘭。聞こえてるか？』

間延びした薔薇の声がCFCIから聞こえてきた。

「うん、聞こえてるよ。———で、空木さんと桔梗母さんはなんて？」

『ああ両方とも、OKだつてさ。蘭が友達を家に招くのは初めてだからな。そこも含めてのことだろう』

薔薇の言葉に思わずほっとする蘭。

（OKって言うてくれたのはいいけど、何か裏がある気が…）

「薔薇姉、念のため確認してもいいかな？」

不安を拭いきれない蘭は薔薇に聞くことにした。

「ん？なんだ？」

首をかしげる薔薇。

「父さんか、母さん…他にも何か言ってなかった？」

「蘭…お前…相変わらずすごいな。なんで分かったんだ、他にも何か言っただってこと」

興味深々に聞いてくる薔薇。

「なんとなくだよ」

「なんとなく…か。——で、親父が言ったことだが、どうせ泊めるのなら晩飯も一緒にどうだ？…だとさ」

（やっぱり…何も考えてないんだから…）

「ちよつと待ってね」

古風 / 風情 / 秘密（後書き）

今回のサブタイトルは、蘭や薔薇、睡蓮の父親の名前である「空木」の花言葉です。

変わらぬ愛／誠実

軽快な音楽が響く。

画面には雪の結晶は映っている。

「なんか父さんが、晩御飯と一緒に食べないかってさ。…どうする？」

顔を見合わせる撫子と紅。

「お邪魔でなければ、いいかな？」

「蘭の家の家庭料理食べてみたいしー」

「OK、じゃあそう言っとくね」

二人が頷くのを見て、顔をCFCIに戻した。

「薔薇姉、聞こえてた？」

『おう、今日の晩飯は二人分追加だな。——親父とお袋にも伝えとく』

画面の向こうでワイルドな笑みを浮かべる薔薇。

「うん、それじゃあお願い。」

『おう』

「あ、母さんも何か言ってた？」

蘭が思い出したように言った。

『おお、忘れるところだった…』

「そのまま忘れなくてよかったね…。忘れてたら、桔梗母さんに殺されてたかもよ…？」

『だな…』

同意する薔薇。

（考えただけでぞっとするぜ…）

「で？」

話を戻す蘭。

『なんか、蘭の部屋は三人寝るには狭いだろうから、母さんたちの部屋を貸すからそこで寝ろってさ』

「薔薇姉…そんな大切なことを忘れないでよ…」

『わりい、わりい』

形だけは謝ってみせる薔薇。

形だけなので、悪びれている様子はまるでない。

「分かった。そう母さんに伝えておいて」

『おう。んじゃーなー』

そついうと蘭は回線を切った。

（つて、桔梗母さんたちの部屋はアジトの中にあるじゃん！！）

もう一度家への回線をつなぐ蘭。

『もつしもーし、土田ですが…つて、なんだまた蘭か。どうした？』
暢気に話す薔薇。

「桔梗母さんたちの部屋つてさあ、薔薇姉。」

『うん？なんだ？』

「ああ、安っぽさごくわずかにおける百日草日本酒…？」
隣にいた紅と撫子は、蘭の発した謎の言葉に絶句した。

（え…安っぽさごくわずかにおける…？）

（百日草日本酒…？）

首をかしげる二人。

（（蘭何言ってるの！？））

二人には、さっぱり分からなかった。

が、どうやら薔薇には分かったらしい…。

『そういえばそうだな…。それは確かにまずいよな…』
CFCIの向こうで考える薔薇。

『ちよつと待ってる、今もう一回聞いてきてやるから』
「うん、お願い」

軽快な音楽が流れる。

画面には綺麗な花畑の風景が映る。

「…ねえ、蘭」

紅がおもむろに口を開く。

「うん？どしたの？」

首をかしげながら紅の方を向く蘭。

「＜ああ、安つぼさごくわずかにおける百日草日本酒＞…って何？」

「ああ、あれかあ…。あれはねえ、聞かない方がいいと思う。――

――うん、世の中には知らない方が幸せなこともあるよ」

ごまかす蘭。

「知らない方が幸せって…アンタの家で一体何をやってるのさ…」

「…紅、やめよう。プライベートの詮索はルール違反」

撫子が「気になる」と目で言っただま、紅を止めた。

「ま、そういうこと」

謎の微笑を浮かべ、蘭は薔薇からの返事を待った。

変わらぬ愛／誠実（後書き）

改稿しました。

少し長くなり、内容も若干変えました。

今回のサブタイトルは、蘭たちの母親である「桔梗」の花言葉です。

追憶

「母さん…だから、蘭たちに母さんたちの部屋を使わせるのなら、アジトの中まで入れないといけないだろ？」

「ええ、そこまでは分かるわ。でもなぜ使わせたらいけないの？別にばれちゃってもいいじゃない」

まるで他人事のように言う桔梗。

「いや、ばれたらマズイだろ！」

「お、落ち着いてください！薔薇様！！」

興奮する薔薇を押さえ込む一人の少年。

「放せ、橘！たちはな！」

「放しません！とりあえず、落ち着いてください！！」

渋々おとなしくなる薔薇。

（くそっ…母さんを何とかして説得しないと…。このままだと、家うちがくマフィア>だってことがばれちゃう…。何かいい手は…）

「桔梗様もこの家がくマフィア>だとばれるのは、よくありません」

「そうなの？——分かったわ、橘。これからは、そういうことも考えるわ」

「お願いします」

（そうしてもらえないと、僕がもたない…）

薔薇は橘が桔梗をなだめている間も桔梗を納得させることを考えていた。

（待てよ…。あ！いい手があるじゃねえか！あの手なら…）

薔薇は心の中で思いついたことをそのまま口にした。

「母さん、可愛い娘の蘭が、学校に行けなくなっても——」

「ダメ！！それだけはダメだわ！！」

いいのか？、と薔薇が言い終わる前に桔梗がそう叫んだ。

「なんとしても私たちの部屋を使わせてはいけないわ！！」

（簡単だな…）

こうして桔梗は悲しいことに、薔薇にそう心の中で思われた。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

『おい、蘭ー』

C F C Iの軽快な音楽が止まり、画面の向こうには再び薔薇が現れた。

「聞こえてるよ、薔薇姉」

『部屋は、睡と俺の部屋を使うといい。あの部屋は仕切りをもう取って準備しておいたから』

「ありがとう、薔薇姉」

画面の向こうにいる薔薇に向かって微笑む蘭。

『にしても、蘭は相変わらず頭いいなー。俺なんか、ちんぷんかんぷんだったぜ』

「なんのこと？」

首をかしげる蘭。

『さっきの、くああ、安っぱさごくわずかにおける百日草日本酒のことだぜ』

「ああ…。分かった薔薇姉もすごいと思うんだけど…？」

『いやー、隣にいた睡が言ったんだよ』

画面の向こうで苦笑いする薔薇。

「そうなんだ…さすがは睡兄。頭の回転が速いんだね」

『お褒めにあずかり光栄です、ってね』

一人の男が画面に映る。

「睡兄、薔薇姉から聞いてると思うけど…」

『うん、部屋の用意は薔薇が言ってた通りちゃんとしてあるから』

微笑む睡蓮。

『じゃ、そういうことだから。ちゃんと、用意して待ってるぞー』
「うん、じゃあまた後で」

そついうと蘭は再び回線を切った。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「でもさすがは蘭だよな」

「<ああ、安っぱさごくわずかにおける百日草日本酒>でしょ？」
睡蓮の言葉に頷く薔薇。

「アナグラムは蘭の得意分野だからね」
「そうそう、で。あれどうやって解読するんだ？教えてくれよ、睡蓮」

はあ――

わざとらしくため息をつく睡蓮。

「薔薇：僕、前にも教えた気がするんだけど？」

「気のせいだって。それに、蘭は毎回毎回難しいのばかり言うてくるんだぜ？俺に分かるわけないだろ？」

自信満々に言う…威張る薔薇。

（暢気なこった…。教える僕の身にもなってほしいものだよ…）

そんな睡蓮の心境を知る由もなく、薔薇は睡蓮をせかす。

「早く教えてくれよ、睡蓮」

（はあ…。いいかげん覚えてよ…）

心の中でそう思いながら、何度目になるのか分からないアナグラムの説明を始めた。

「まず、普通に<ああ、安っぱさごくわずかにおける百日草日本酒>を英語に変換する」

睡蓮が薔薇にも分かるように説明を始める。

「すると、A h a Z i n n i a S a k i A t T a t J o
tになる。…ここまでは大丈夫だよね？」

睡蓮の確認に頷く薔薇。

「そして、蘭のアナグラムはすべて言いたい日本語をローマ字に変換して、それをさらに並び替えて英語にして、意味の通る文に意識されているんだ」

首を九十度にかしげる薔薇。

「俺にも分かるように説明してくれ…」

「これ以上簡単な説明はないよ」

ぱつさり切る睡蓮。

「続けるよ——だから、さっき英語に変換した、A
h a Z i n n i a S a k i A t T a t J o tを日本語に
なるように並び替えて、さらに、何が言いたいのか最大限考えなが
ら日本語に並び替えると…」

何処からか紙とペンを持ってきて、書いていく睡蓮。

「t a s h i k a a z i t o n i a t t a n j a …？」

——あ！<確かアジトにあつたんじゃ>!!」

「正解」

（なんとか理解してくれた…）

睡蓮は、一人心中のため息をついた。

「蘭は、これを言いたかった。だけど、友達が横にいる状態でこれ
を言つと」

「<アジトって何？>ってなるから、それを避けるためにアナグラ
ムを使った…というわけか」

薔薇が睡蓮の言葉を引き継いで言った。

その言葉に無言で頷く睡蓮。

「だから、次からは分かった振りして僕に聞きにこないでね」
謎の笑みを浮かべる睡蓮。

「お、おう」

その笑みに気押された薔薇は引きつった笑みを浮かべ、頷く以外に出来なかった…。

追憶（後書き）

今回のサブタイトルは、薔薇の側近的存在の「橘」の花言葉です。
少し長くなってしまい、すみませんでした。

靈感／ひらめき／直感／神秘

「ということで、今晚は家に泊まってもいいってさ」

CFCIをポケットに直しながら蘭が言った。

「やったね 初めて蘭の家に行ける！」

（謎は残っているけど……！！）

「……謎だった蘭の私生活が……今日、明らかに……」

（謎の言葉の意味も明らかに……！！）

動機が不純な二人。

「……一体私の家^{うち}で何をする気なのさ……」

一人頭を抱える蘭。

「それに、撫子の身に何があつたのかを聞くのが本来の目的なんだからね？」

忘れないでよ？、と念を押す蘭。

「だって、幼稚園からずっと一緒になのに蘭の家って行ったことがないんだもん」

「……そうだったっけ？」

紅の言葉に蘭が首をかしげる。

撫子がそれに答える形で頷く。

（ふーん……そうだったんだ……。覚えてないや……）

蘭はそう思ったが、もちろん口にはしなかった。

「それを言うのなら、私だって紅の家には行ったことないよ？」

「あれ！？そうだったっけ？」

頷く蘭と撫子。

「ま、どうするか決まったことだし帰りますか」

「そだね」

紅の提案に頷く蘭。

「蘭の家までレッツラゴー！」

「…紅のテンションについていけない…」

「蘭、紅はほつといても大丈夫」

と、本人が聞こえてないのいい理由に、言いたい放題な蘭と撫子であつた…。

「あ、そうだ。着替えとか取りに帰る？」

蘭が二人に問う。

「うん…どうしよかな…」

撫子は？、と聞こうとしたが紅は口に出すのをやめた。

「…私はいつも着替えを持ち歩いてるから大丈夫」

スチャツ――

かばんの中から出し、見せる撫子。

「やっぱり…」

思わず紅がつぶやいた。

言われた当の本人は何のことだか分からない、というような顔をしていた。

「私はいつ服が汚れてもいいように持って来ているだけ」

さも当然、といった顔で言う撫子。

（うん…もういいや…）

紅は心の中でつつこむのを密かに諦めた。

「じゃあ、アタシ取りに帰ってもいい？」

紅が手を挙げて言う。

「いいよ。―――じゃあ紅の家に行ってから、私の家に行

くルートでいいかな？」

蘭が二人に確かめる。

「OK」

「うん」

二人が答えるのを見て、三人は教室をあとにした。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「へえ…ここが紅の家か…」

そっとう蘭の目の前には大きな和風の門構え。

「くぐるのが怖いような…」

中からは、次々と厳つい男が出てくる。

「おう、紅。今帰ったのか」

と、一人の坊主頭の厳つい男が声をかけてきた。

「うつす。うん、今日は蘭の家でお泊りなんだ。だから、着替えを取りにきたの」

「そうか。——すまねえな、蘭ちゃん。よろしく頼むわ」
軽く会釈すると去っていく男。

「…あれって確か、紅のお父さんだったよね？」

蘭が確認の意を込めて、紅に問う。

「そだよ。三木金縷梅^{みきまんさく}」

「昔と随分雰囲気が変わったような…」
蘭がつぶやく。

（昔はもつと柔らかい雰囲気をもった人だったような…）

「そかな？前からあんなだよ、親父は」
首をかしげる紅。

「…紅、一つ確認」

「うん？何？」

撫子が、なんともいえない眼差しで紅を見る。
首をかしげる紅。

「紅の家は…やくざか何か…？」

長い長い沈黙。

「な、何言つてのよ撫子！ち、違つよ…！」
手をブンブン振り回す紅。

「紅…首筋から刺青が見えてるよ…？」

蘭の指摘にパツと首筋を隠す紅。

「…見えてた…？」

「ちらつと…だけどね…」

重く長い沈黙。

それを破つたのは、一人の可憐な少女だった。

靈感／ひらめき／直感／神秘（後書き）

今回のサブタイトルは、紅の父親の「金縷梅」の花言葉です。

恋／呪い

「あー！姐さん！おかえりなさい！！」

家の中から走って出てくる可憐な少女。

紅が頭を抱える。

（あちゃー… タイミング悪っ）

「姐さん、今日は帰りが遅かったですが何かあったのですか？」
瞳^めを輝かせ、まるで子犬みたいに言う少女。

その容姿は、百人いたら百人振り向くこと間違いなし。

おそらく十四・五歳なのだろうが、童顔なため残念ながら十二歳ほどにしか見えない。

「…紅、やくざ、姐さん… メモメモ…」

後ろを向き、紙にメモしながらつぶやく撫子。

「あ、姐さんのご学友ですか。はじめまして、黒百合^{くろゆじ}と申します」

軽く会釈する黒百合。その横には、可憐な顔につりあわない怖い契霊を連れていた。

「蘭です」

（あの契霊…）

「撫子です」

（どう見ても…）

それぞれ名乗り、軽く会釈する。

「ああ！姐さんの幼馴染の方ですね。お話は伺っております」
微笑む黒百合。

（（白い虎にしか見えない！！））

「ところで姐さん、何か御用があつたのでは？」

紅のことをよく知っているのだろう、話を戻す黒百合。

「あ、そうそう。アタシ、今日蘭の家に泊めてもらうの。だから、着替えを取りに一旦帰ってきたって訳」

ああ、と手をたたく黒百合。

「巷^{ちまた}ではやりのパジャマパーティなるものですね。楽しそうです。」

——私も用意を手伝いましょうか？」

「うん、助かる！——じゃあちょっと待っててね」

そういうと中に入っていく二人。

「りようかい」

（やくざ…か…。ジャパニーズマフィア…だっけ…。紅も私と同じなのかな…）

「紅…やくざの姐さんだったんだ…知らなかった…」

撫子が独り言のようにつぶやく。

「うん…。幼馴染…なのにね、私たち」

俯く撫子と蘭。

「そういえば、蘭にお姉さんがいるの、私知らなかった…」

「私だって、紅の家がこんな和風の大きな屋敷だったなんて…、しかもやくざだったなんて…知らなかった…」

顔を見合わせ、苦笑する蘭と撫子。

「——その知らないところを知るために、今日は蘭の家に泊るんでしょうが」

いつの間にか、出てきた紅。

（紅のくせに…。たまに物凄く的を射たことを言うんだから…）

蘭は心の中で苦笑し、それは隠しきれず顔にもでた。

「それに、私はやくざじゃない!!」

「やくざでしょ」

撫子と蘭、そして黒百合にまで言われ返す言葉がない紅。

「~~~~~!!」

「まあまあ…。でも、姐さんの言うとおりですよ。知らないことがあつて当然です。これから知っていけばいいじゃないですか」
後ろから紅に従う形で出てきながら言う黒百合。

「そうだね」

力強く頷く撫子。

「さ、荷物も取つたし、あとは蘭の家に直行だ〜！」

「「「おう〜〜〜〜〜〜〜〜！！」」」

元気に握つた手を上に持ち上げる三人。

「いつてらっしゃいませ、姐さん」

門の前でお辞儀する黒百合。

「いつてきま〜す！！」

そういうと三人は、蘭の家に向かい歩き始めた。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「…紅は行きましたか？」

いつの間にか、お辞儀する黒百合の横に立つ女。

「はい」

女に向き直る黒百合。

「今日は蘭様の家にお泊りになるようです」

「…そうですか。…分かりました」

微笑む女。

「あ、そうそう。——黒百合、アナタは何か思ったことがあるましたか？」

「思つたこと…ですか？…そうですね…」
考え込む黒百合。

「蘭様…。あの方は何か違った空気を纏まとわれていました」

「というと？」

「こう…何か普通の人とは何か違う…そんな空気を纏まとっていました」
「一つ一つ思い出しながら、言う黒百合。」

「って、すみません！こんな変なことを言ってしまった…。変ですよね」

微笑む女。

「いいえ、聞いたのは私わたくしですから」

「では、これで失礼させていただきます、杏子あんず様」
「そういうと黒百合は立ち去っていった。」

「鈴蘭…。私の愛しい子よ…。いつかまた会いましょう…」
「そう言い残すと、杏子も家の中へと戻っていった。」

恋／呪い（後書き）

今回のサブタイトルは、紅の家に仕える「黒百合」の花言葉です。

誘惑／乙女のはにかみ

「ここが私の家だよ」

そう言う蘭の後ろには、ごく一般的な家が建っている。

「「おお——」」

二人から感嘆の声が上がる。

「さ。早く入って」

「「おじゃまします」」

中に入ると、桔梗が瞳を輝かせて、蘭が二人を連れてくるのを待ちかねていた。

「いらっしやい。あなたたちが紅ちゃんと撫子ちゃんね」

満面の笑みで二人を向かいいれる桔梗。

「はじめまして、蘭ちゃんの母の桔梗です。今日は、楽しんでいてね」

「「はい！よろしくお願いします！——」」

「蘭ちゃん、お部屋は薔薇ちゃんからも聞いてると思うのだけれど」

「薔薇姉と睡兄の部屋を使えばいいんだよね？」

「ええ。夕飯の用意が出来たら呼んであげるから、みんなとお部屋で遊んでいても構わないわ」

「っこり、と微笑む桔梗。

「ありがとう、母さん」

「コッチだよ」

蘭を先頭に薔薇たちの部屋へと向かう三人。

ガチャ

「わあー！広ーい——」

「こんな大きな部屋……使っても大丈夫？」

テンションが上がり、瞳をキラキラさせている紅に対して、心配そうに問う撫子。

「大丈夫だよ。――荷物はその辺に置いていいよ。私、ちよつと着替えてくるから、紅たちも着替えといたら？制服のままだとなんだか落ち着かないし」

「そだね。こんな服でも一応制服なわけだしね」
蘭の提案に頷く二人。

二人が頷くのを見て、蘭は一度自分の部屋へと向かった。

紅の言う「こんな服」とは、蘭や紅、撫子が通う花園学園中学部の制服のことだ。

制服とは名ばかりで、実際はほぼ私服状態になっている。

女子は、暖色系統の赤、橙、ピンクの三色から自分で選んだ色のチエックのポンチョとリボン。男子は、寒色系統の紺、黒の二色から自分で選んだ色のブレザーとネクタイの使用が校則により、義務付けられている。

今あげた物を着用していれば、花園学園中学部では制服とみなされる。

よって、女子でだからといってスカートを穿いていなくても校則違反にはならない。

結果、私服の上にポンチを着て、リボンをつけた。

この状態が女子の制服になっている。

とはいっても、学校に着て行くわけだからある程度の節度は守られている。

よって、ほぼ私服状態であっても制服に変わりないので、蘭は着替えることを提案した：というわけだ。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「ふう」

着替えが終わり、ちょうど一息ついたところにノックが鳴った。

「はい」

（誰だろう…？）

そう思いながらも蘭は部屋の扉を開けた。

ガチャ

扉の前に立つ一人の少年。

「橘くんじゃない…どうしたの？」

「あのお…蘭様…」

申し訳なさそうに話す橘。

（薔薇姉…橘くんに関わらせようとしたみたいね…）

「そんなに小さくならないで。薔薇姉に何を伝えるように言われたの？」

「わ、分かるのですか！？」

驚きを隠せない橘。

「分かるよ、薔薇姉のことだもん。どうせ、『仕事に行きたいなあ』みたいな事を薔薇姉が言ってたって伝えて来い！』とか言われたんでしょ？」

「その通りなんです！！ですが、蘭様は本日、ご友人と交流を深めるとお聞きしていましたので…それで…」

（言いくか…というわけか…）

心の中で橘の言葉を引き継いだ蘭。

（なるほどね…）

急に蘭の顔に満面の…真っ黒な笑みが浮かぶ。

（ら、蘭様が悪いことを考えていらっしやる…！！）
身の危険を感じ、後ずさりする橘。

その様子は、ライオンがウサギを脅しているようにも見えた。

「橘くん、薔薇姉に伝言を頼んでもいいかな？」

「は、はい」

声が震えないように必死に力をいれて言う橘。

「オーク、ばり変人動物園…て、伝えておいて」

その言葉を聞いた橘は、引きつった笑みを浮かべて

「わ、かり、ました…」

と言った。

（この家の中で誰よりも一番怖いのは、蘭様だ！！）

橘は、そう心の中でつぶやきながら蘭の部屋の前をあとにした。

（さて…。私も紅たちのいる部屋に戻るとするかな…）

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

ガチャ――

「遅いよ、蘭！！」

頬を膨らませて言う紅。

「ゴメン、ちよっとついでに用事も片付けてきたから」

もう、と頬を膨らませながら言う紅。

「さて…。撫子。そろそろ教えてもらってもいいかな？昨日何があって、撫子がそんなに包帯ぐるぐるなのか」

真剣な顔つきで問う蘭。

「…うん。――昨日…あのあとに――」

撫子がポツリ…ポツリと話し始めた。

誘惑／乙女のはにかみ（後書き）

今回のサブタイトルは、紅の母親の「杏子」の花言葉です。

今年はこの更新で最後となります。
みなさんよいお年を（）

良い便り／信じるものの幸福／消息

「まあ、地原さんちばしんはもう帰っていいわよ」
女教師が撫子に向かつて言う。

「あなたは、友人を守るために靈式を発動させたのだから」
微笑む教師。

「でも、次はないからね」

教師の言葉に無言で頷き、撫子は生徒指導室をあとにした。

（クツ…あいつ…！！絶対に許さないわ！！この私を侮辱したことを後悔させてやる！！）

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「ただいま」

家の扉を開けると、玄関が荒らされていた。

（強盗…！？）

家の奥へと入っていく撫子。

「お母さん！居たら返事して！！」

と、一番奥の部屋から複数の声が聞こえてきた。

— あなたたちは一体誰なの！？

一人の女の声。

（お母さん！！よかった…）

ほっとした次の瞬間。

— 貴様の子は我らの主を侮辱した！！

（私が…侮辱した…？）

何がなんだか分からない撫子。

— あの子はそんなこと、しないわ！！

強く言い返す、撫子の母。

バンツ

銃声が家中に響き渡る。

「もう……我慢できない……」

足元に居た撫子の契霊の白いウサギが蒼い光を帯び始める。

ガチャ

撫子は声がしてくる部屋の扉を開けた。

「撫子！？」

驚きを隠せない様子の撫子の母。

「許さない……」

部屋に居る謎の黒いスーツを着た集団に言い放つ。

「ああん？」

サングラスをかけた男が撫子に詰め寄る。

「『許さない』？こっちだつてなー、主人を侮辱されて許せねえんだよー！」

男が乱暴に撫子に殴りかかった。

が、それを撫子は軽々と避けた。

「あんたたち全員許さない！！」

さらに蒼い光を帯びるウサギ。

「蒼水、水流」

撫子は右手で空を薙いだ。その撫子の指示でウサギの蒼い光が蒼い水となり、大きな波が謎のスーツの集団を襲う。

「わあ——！！」

情けない悲鳴をあげ、次々と気絶していく。

が、その中の一人が気絶する直前に靈式を發動した。

「死ねええええええええええええええええ！！」

オレンジ色の霊式……炎だ。

ドツカ

——ン！！

大きな爆発が起こった。

「くっ！」

（あいつらが持っていた銃の弾に引火した……！？）

かき消されそうな意識を必死に繋ぎとめる撫子。

その時、急に目の前の世界が水に覆われた。

（撫子が頑張ってくれたんだもの……私だって……）

撫子の母の肩に乗っている、小さなパンダが蒼みを帯びる。

すいけっかい
「水結界」

撫子の母を中心に球状の水が出現し、家全体を多い尽くす。

これが自分の母親の霊式だと気付いた撫子は、母親に駆け寄った。

「お母さん！？」

心配そうに顔を覗き込む撫子。

「大丈夫！？」

力のない笑みを浮かべる母に抱きつく撫子。

「ごめんなさい……。私の所為で……」

涙をこぼさないように必死に堪えながら言う撫子。

そんなまでしこの頭をそつとなでる撫子の母。

「私は……地原あやめは、撫子……アナタの母親よ？そんなこと……気にしないでいいの」

微笑み、撫子の頭をそつと撫でるあやめ。

「……ありがとう、母さん」

撫子もあやめに微笑み返した。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「というわけで、この包帯は爆発のときに飛んできたガラスの破片とかで怪我しただけ」

問題ない、と撫子が言う。

「そつか…。ああ、よかった。話の流れからその集団に何かされたんだと…」

「私もそう思ったー」

紅と蘭は、思っていたより軽症ということが分かり思わず笑みがこぼれた。

「でも、問題なのはその集団だね」

蘭の発言に無言で頷く二人。

「心あたりは…」

無言になる三人。

「あの馬鹿お嬢…？」

「…たぶん」

紅が口にした言葉に頷く撫子。

「土村…だっけ？」

蘭の問いに無言で頷く撫子。

（土村…。あれ…？どこかで聞いたことがあるような…）

「あ~~~~~！！！」

「「紅うるさい！！」」

急に叫びだした紅を叱りつける蘭と撫子。

「土村家…！そくだよ！あの土村家じゃん！！」

「「どの土村家だよ！！」」

そろって紅を怒鳴る二人。

「土村家はやくざで、しかも、イタリアにあるマフィアのファミリーをバックにつけてるって…！！」

（マフィア！？——あのクソやろお…！！）

「紅、それは有名？」

「うん。やくざの世界では有名だよ！なんせ、日本のやくざとイタリアのマフィアが組んでるんだもん！！！どんだけ痕処理をしても、噂がたつよ！！」

紅が言っている言葉に怒りを覚える蘭。

（私の友達に…。よくも…。許さない…）

唇から血がにじみ出るほど強く噛む蘭。

「蘭…。どしたの？とりあえず、落ち着いて」

心配そうに顔を覗き込んでくる紅。

「…。うん。それより、月曜日にあの馬鹿に問いたさそうよ」

「うん、やっていいことと、悪いことを教えてあげないとね…！」

「私も…。あの馬鹿だけは許せない…」

なにやら不穏な空気が漂う部屋。

そんな空気を変えたのは一つのノックだった。

良い便り／信じるものの幸福／消息（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願います。

年明け最初の更新となりました今回のサブタイトルは、撫子の母、
「あやめ」の花言葉です。

守護神

コンコンッ

ノックが部屋に響く。

「はい」

と、蘭が部屋の扉を開けると一人の男が立っていた。

「ご飯の用意が出来たっすよ」

場が和むような微笑を浮かべる男。

「ありがとう、茅さん^{ちがや}」

微笑み返す蘭。

「紅、撫子、食べに行こう!」

顔を見合わせ微笑む二人。

「うん」

「そだね」

そついうと三人と睡蓮はダイニングのある部屋へと向かった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

ダイニングに着くと既にたくさんの料理がテーブルの上に並べられていた。

「わあー!!」

テーブルの上に並ぶ料理をみて、感嘆の声をあげる紅。

「すごいですね!!」

（料理の量が!!）

「そうかしら? うちはいつもこんな感じなのよ」

紅の言葉に、そう返す桔梗。

テーブルの上に置かれた皿はみな、限界まで料理が盛られている。

「さあ、たくさん食べてちょうだい」

微笑みながら言う桔梗。

「いただきます!!!」

全員が声をあわせてそういうと、黙々と食べ始めた。

「おいしい…」

ひとくち、またひとくちと食べる撫子。

「そう。口にあったようで何よりだわ」

（蘭のお母さん…とても優しいそう）

そんな桔梗をみて思う撫子。

と、そこに一人の男がダイニングへと入ってきた。

「あら。おかえりなさい、空木」

「ただいま。——紅ちゃんも撫子ちゃんも久しぶり」

微笑む空木。

「お久しぶりです」

「お元気そうで何よりです」

それぞれ返す紅と撫子。

「今日は楽しんでいくといい」

穏やかな微笑を浮かべる空木に、場が和んだ。

「「ごちそうさまでした」」

あれだけたくさんあった料理をすべてたいたげた。

「おいしかったかしら？」

「はい！とってもおいしかったです!!」

「また、ご飯だけでも食べに来たいぐらいです」

それぞれ夕飯の感想を言う二人。

「大げさよ、二人とも」

照れ笑いしながら、たしなめる桔梗。

「さて…と」

蘭がおもむろに口を開いた。

「お風呂にでも入ろっか」

「そだね」

「うん」

「お風呂も、もう沸かしてあるっすよ」

茅の言葉に頷くと、三人は一度部屋へと戻り風呂場へと向かった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「うわぁー！」

感嘆の声を上げる紅。

その紅の目の前に広がるのは、一つの大きな浴槽。

「軽く10人は湯船に浸かれそう…」

撫子がつぶやく。

「寒いから、早く入ろうよー」

風呂の入り口で立ち止まっている二人を急かす蘭。

「そだね」

「うーん！おつきいお風呂はやっぱいいねえ」

伸びをしながら言う紅。

「日ごろの疲れが取れる…蘭、本当に誘ってくれてありがとう」

撫子言う。

「いえいえ、またみんなでこれからもやっていこうよ！パジャマパ

ーティー！！」

「だねえー！！」

蘭の意見に同意の声を上げる紅。

「次は紅の家」

撫子がボソツとそう言った。

「だ、ダメ！絶対にダメだよ！！」

「だね、撫子。なにを持っていこうか？」

「カメラは絶対いる」

「ちよ、二人ともアタシのはな」

「うん、紅がやくざっていう証拠を写真に記録しないとね」

紅を無視し、話をどんどん進めていく二人。

「二人ともアタシの話を聞け！！」

「「やだ」」

二人の声のそろった返答に肩を落とす紅。

（二人はこうなったらアタシじゃ止められないじゃん……！！）

紅は心の中でそう叫んだがもちろん、心の中なので二人にはまったく聞こえていなかった。

その結果、次の開催する家は紅の家に決まった。
もちろん、紅の答えなど聞かずに二人で決めた。

「さて、次のことも決まったことだし、そろそろ上がって寝るとしますか」

「うん」

「そ、そだね」

蘭の提案に頷く撫子と紅。

だが、紅の方は少し……いや、かなり疲れた様子だった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「布団まで敷いてくださって……ありがとうございます」

深々と頭を下げる撫子。

その前には微笑む茅。

「いいえ、どういたしまして」

「ありがとう、茅さん」

微笑む蘭。

「さ、今日はもう遅いし、みなさんおとなしく寝てくださいよ？」
と、茅の隣でお茶の用意をしながら橘が言う。

「「「はい」「」」」

「では、おやすみになる前にこのお茶をどうぞ」

微笑み、湯飲みに注いだお茶を渡す橘。

「これは？」

「これは、僕特製のお茶です。寝る前に飲むと、とてもいいんですよ」

へえ、と紅と撫子は言う、それをひとくち口に含んだ。

「わぁ、ばわぁ、んってなりますね」

言葉までばわぁ、となる紅。

「さ、これを飲んだらおやすみになってくださいね」

「ごちそうさまでした。とても、おいしかったです」

「それは何よりです」

橘はそう言い、微笑むと湯飲みをもらい、部屋をあとにした。

「では、おやすみなさい」

「「「おやすみなさい」「」」」

三人が声をそろえて返事し、布団に入るのを確認した茅は部屋の明かりを消した。

守護神（後書き）

今回のサブタイトルは土田家に仕えるお手伝いさんのひとり「茅」の花言葉です。

高貴／富貴／壮麗／恥じらい／誠実（前書き）

改稿しました。

2012／1／13

高貴／富貴／壮麗／恥じらい／誠実

（二人とも寝た、よな……？）
うかが
隣で眠る紅と撫子の様子を窺う蘭。

スウ

小さな寝息をたてる二人。

（ごめん……二人とも……）

心の中でそうつぶやき、二人が眠っていることを確認した蘭は、部屋をあとにした。

[illegible]

「ら……。……麗様、お二人は……？」

不意に背後から声を掛けられた。

「眠っていた。お前の茶が効いたのだろう、橘」

蘭は……麗は振り返らずにそう言った。

「お褒めいただき光栄です」

茶……というのは、橘が三人が寝る前に飲ませた橘特製の茶のことだ。正確には、茶ではなく強力な睡眠促成剤の入った茶だ。

それを紅と撫子の二人に飲ませた。

蘭の湯飲みにはもちろん入れていない。

夜勤するためには二人が深い眠りについていないと動きにくい。

なので、蘭があらかじめ橘に薬を入れた茶を出すように指示したのだった。

「行くぞ……夜明けまでに片をつける」

「かしこまりました」

背後にいた橘は、踵を返すと橘の花びらと共に姿を消した。

と、次の瞬間。

目の前に睡蓮の花と共に睡が現れた。

「意外と早かったね」

睡が言う。

「ああ。——それより」

「うん、屋敷の中庭にいたよ」

「そうか…。仕掛ける前に一つ」

麗がおもむろに口を開いた。

「ん？なんだ、麗？」

棘が問い返す。

「くれぐれも、己の力を見せ付けるような戦い方をするな」

「了解つす」

「以上だ。他のものもこれだけは守ってくれ」

全員が頷くのを見て、麗たちは屋敷へと入っていった。

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

「お嬢」

土村組組長、牡丹が後ろからの声に振り返ると、そこには謎の五人組がいた。

「何者！？ここが何処だか分かっているの！！」

「土村組総本山…違うか？」

黒のロングコートを着た漆黒の短い髪のおそらく少年が言う。

その少年の周りには一匹の黒に青紫の蝶が飛んでいる。

「その総本山にどうやって入ってきたの？って聞いているのよ！！」

曲者よ！！、という牡丹の声に次々と中から黒いスーツの者たちが出てくる。

「さあ…特別講義おしあきの時間のはじまりだ」

麗の言葉と共に全員が一斉に戦闘を開始した。

戦況は圧倒的な差で、麗たちが勝っていた。

麗は次々と黒いスーツの集団を氷付けにし、辺り一面を氷の世界へと変貌させてゆく。

棘は二丁の拳銃を巧みに操り、敵の数をどんどん減らしてゆく。

（残りあと少しだな…）

●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○●○○

（アイツは何処だ…？）

麗が辺りを見渡すと、一人背を向け逃げ去っていく少女がいた。

「逃がすかよっ！」

麗が右手を左から右へと薙ぐ。

「桜華、桜吹雪」
おつか さくらふぶき

麗の攻撃により、桜の花びらの形をした氷の手裏剣のようなものが吹雪のように舞い散りながら、少女に当たった。

高貴／富貴／壮麗／恥じらい／誠実（後書き）

今回のサブタイトルは土村の名前、「牡丹」の花言葉です。

素朴なかわいらしさ／無意識の美

「あ、ああ……」

麗の前には地面に座り込み、後ずさりしていく少女。

その周りにはスーツの者たちが武器を構え、霊式を発動させる直前で氷付けにされていた。

「お前：自分が何をしたのか分かっているのか？」

一歩、また一歩、歩み寄る麗。

その周りでは棘、睡、茅、橘が残りわずかとなったスーツの者たちをそれぞれ蹴散らしている。

「あ、ああ……あな、た……は……、」

震える声で言う少女。

「つ、土……田、さん……！！」

少女の顔は見る見るうちに畏怖の色に染まっていく。

「だとしたら……？何だというんだ？」

背後に壁が迫り、それ以上後ずさることが出来ずに震えることしか出来なくなる少女。

「土村牡丹^{つちむらぼたん}……やくざ、土村組の現組長であり、イタリアのマフィア

『^{モルテ}morteファミリー』と同盟を結んだ者」

淡々とした口調で言う麗。

「ど、どうし……て、あな……た、が……？」

怯えた瞳で麗を見上げる、問う牡丹。

「簡単だ。俺は『^{ペタロ}petaloファミリー』のボスだから、だ。モルテファミリーとは俺たちも同盟を組んでいるんでな、調べるのは簡単だ」

「ボ、ス……？あなたが……？嘘！あなたがボスだなんてありえないわ！」

いつもの調子が戻ったのか、急にまくし立てるように話し出す牡丹。
「ありえないわ！だって…だって…」

段々声が小さくなっていく。

「だって…なんだ？」

「だって、可らしいじゃない！ボスは普通成人してから継ぐものじゃない！」

「それは誰が決めたんだ？現にお前は成人前だが、組長を継いでいるじゃないか」

麗の言葉に返す言葉がない牡丹。

「ファミリーのルールを決めるのは、そのファミリーの奴らだ。他人が決めることではない」

黙り込む牡丹。

「もういいな。———今、ここで誓え」

「な、何を誓わせるっていうのよ！！」

「二度と俺の目が届く範囲の人間を傷つけない、と」

「まさか…地、原さんのこと…？」

麗が殺気を込めた視線で牡丹を睨む。

「ほかに何があるんだ？」

麗の殺気に気圧^{けお}されて反論できなくなる牡丹。

「分か、ったわ…。誓う…二度とあなたの目の届く範囲の人たちには危害を及ぼさないわ」

しつかりとした眼差しで言う牡丹。

「あともう一つ」

「え？…ま、まだ何かあるの！？」

「俺がマフィアのボスだということは誰にも言うな」

「…分かったわ…。言わない」

「頼む。言ったら俺はお前を殺してしまうかもしれない」

「…！！」

息を飲む牡丹。

「お前が言わなければそんなことはしない」
そう言っと、周りで戦っていた棘たちの様子を窺った。

「終わっていたのか」

「分かっていたくせによー」

棘が頬を膨らませながら言う。

「何が不服なんだ？十分遊べただろう？」

「だってさー、全然面白くなかったんだもん」

（“だもん”って…）

「だとさ、土村」

「そ、そんなこと言われたって、私には何も出来ないわ！――

――あなたの同盟ファミリーなのでしょう？自分で強くしてあげたらどうなのよ？」

「ああ…あれは、嘘だ」

「え？」

驚きで変な声を出す牡丹。

「嘘だと言っている」

「う、嘘って…。じゃ、じゃあ私がやくざの組長とかどうして分かったのよ！？私、学校では誰にも言っていないわよ！？」

パニックを起こす牡丹。

「ペタロファミリーをなめられたら困るっす」

牡丹の問いに茅が答えた。

「そういうことだ」

「さて…夜明けが近い…。帰るぞ」

「だなー。もう。眠くて眠くて…」

ふあゝ、と大きなあくびをする棘。

「棘」

「ん？なんだ？」

「あとで、覚えておけよ？」

両耳を塞ぎ聞こえないアピールをする棘。

「僕はどうなっても知らないから」

そう言っていると睡はその場をあとにした。

「ぼ、僕もお、お先に、か、帰らせてもらいます!」

脱兎のごとく帰っていく橘。

「おおお俺も、さささ先にか、かかかか帰るから!」

橘に便乗し、物凄い勢いで走り帰っていく棘。

「茅」

「はい、なんすかボス?」

「ゆっくり帰ろうか」

「…そうっすね」

そう言っていると、二人も帰路へとついた。

「ごめんなさい…。私が感情に任せて頼んだばかりに…」

「何言ってるんですか、組長!らしくないですよ!」

一人の女が言う。

「組長をアタイらは信頼しているんですから、組長はどんどんアタイらを頼っていいんです」

「…ありがとう、梶子、みんな」

微笑む牡丹。

その笑顔は歪んだものでなく、真っ直ぐな笑顔だった。

素朴なかわいらしさ／無意識の美（後書き）

今回のサブタイトルは、薔薇のコードネームの「棘」の花言葉です。

「高貴／富貴／壮麗／恥じらい／誠実」の話が長すぎたので、二話に分けました。

次回が、終章となります。

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7720x/>

マフィアのボスですが何か？

2012年1月13日17時49分発行